

カラ・ノデ節中の述語の「同時型スル形」

賈 朝 勃

1. はじめに

従来、従属節の時制は、発話時基準（絶対的テンス）と主節時基準（相対的テンス）とによって説明されてきた。特に相対的テンスに注目して論じた研究に井上（1976）、中右（1980）、寺村（1984）、砂川（1986）、工藤（1989）、また、相対的テンスと絶対的テンスの両方を取り上げた研究に、益岡・田窪（1989）、三原（1992）¹等がある。

次の例はそれぞれ発話時基準（絶対的テンス）と主節時基準（相対的テンス）の例である。

- (1) 明日の朝こちらを出発するから、あさっての午後にはそちらに到着するだろう。
—絶対的テンスの発話時未来（益岡・田窪（1989））
- (2) 翌朝5時に家をでるので、その晩ははやくねました。
—相対的テンスの主節時以後（砂川（1986））

上の例はカラ節とノデ節の例である。一般に、このようなカラ・ノデ節において、運動動詞の述語スル形は絶対的テンスの発話時未来か相対的テンスの主節以後を表すとされる。しかし、中には、発話時未来や主節時以後を表しているとは考えられない述語スル形も存在する。次の例を見てほしい。

- (3) 妹が大きな音で音楽を聞くので、私は両親の話が聞こえなかった。
- (4) 子供が外で騒ぐので、彼女は窓を閉めた。

(3)(4)の従属節事態「妹が大きな音で音楽を聞く」、「子供が外で騒ぐ」は発話時未来とは考えられないし、主節時以後とも考えにくい。カラ・ノデ節に見られるこうした現象については、沈（1984）や岩崎（1994）が詳しく論じている。しかし、後で詳しく見るように、これらの研究にも問題がないわけではない。本稿では、沈（1984）や岩崎（1994）の問題点を踏まえた上で、発話時未来を表すとも主節時以後を表すとも考えられないカラ・ノデ節中の述語スル形について考察を行う。

なお、本稿では、時間的展開性をもたず、スル・シテイルのアスペクト的対立が成立しない静態動詞（「ある」、「いる」、「あたいする」など）は議論の対象からはずし、時間的展開性のある運動動詞（「食べる」、「走る」、「死ぬ」など）に限って考察を進める。

2. 沈（1984）の問題点

前節に述べたような、発話時未来や主節時以後を表すとは考えられない述語スル形の存在をいち早く指摘したのは沈（1984）である。沈（1984）はこのような現象を「脱テンス」と位置付け、具体例として次のようなものを挙げている。

- (5) その男の観察がいつまでも続くので、へんだと思って、横目で見ると、男は平気で岸恵子をスケッチしていたというのである。
- (6) 「まあ、謙さんのな？」お栄が勝手口から顔を出した。「声がするから、だれかと思った……」
- (7) それが、ある朝、まだ床の中にあると、聞き慣れぬ物音がするので飛び起きて窓をあけて見ると、そのアカシヤの木を役所から人夫が来て既に枝をおろしてしまひ、坊主になった幹を倒しにかかっている。

「脱テンス」について沈（1984）は、「テンス的な意味をうしなっているもの、つまり従属節と主節の意味関係の論理的な面が強調されることによって、時間的關係の面が裏にひっこんでしまうものである。」と説明する。そして、この場合の従属節の述語スル形を、「形はあるが、テンスが消えている」のものであると主張している。しかし、上の例をよく観察して見ると、従属節事態と主節事態の間には、「従属節事態が終わっていないうちに、主節事態が起こる」という重なり合った関係、すなわち同時的な時間関係が存在することがわかる。したがって、上の例をあえて「脱テンス」として位置付ける必要はないだろう。

また、沈（1984）は「脱テンス」の起こる要因として、「話し手が、自分が言おうとする事柄が過去の事柄であるということに無関心で、従属節と主節の質的側面を強調し、時間的側面を捨象する」ということを述べているが、それに従えば、どのような場合でも話し手は自在に従属節と主節の時間関係を捨象して、質的側面を強調することができることになる。しかし、事実はそうではない。むしろ、絶対的テンスや相対的テンスによって出来事を表さなければならない場合がほとんどなのである。

以上のように、(5)～(7)のような例を、従属節と主節の時間的關係の面が裏にひっこんでしまう「脱テンス」として位置付けることや、「脱テンス」が使える理由を「話し手が、自分が言おうとする事柄の時間的側面を捨象して質的側面を強調する」ということに求めることは、適当ではないと言える。

3. 岩崎 (1994) の問題点

岩崎 (1994) は沈 (1984) におけるいわゆる「脱テンス」現象、具体的には、ノデ・カラ節中の述語がスル形であって、それが主節の事態よりも先行する事態を表す現象——岩崎 (1994) はこれを「従属節事態先行型のルノデ／ルカラ」と呼んでいる——について、このような現象を起こす文の文法的特徴等を指摘している。

しかし、岩崎 (1994) の分析も、当該現象の位置付けに関しては、沈 (1984) と同様の問題を有している。岩崎 (1994) が「従属節事態先行型のルノデ／ルカラ」とした例にも、従属節事態が主節事態より先行するのではなく、同時である例が多い。

- (8) 花子が泣くので、太郎は飴玉を与えてやった。
- (9) 「じゃ、よろしく。みかげさんが来てくれるのをぼくも母も楽しみにしてるから。」彼は笑った。あんまり晴れやかに笑うので見なれた玄関に立つその人の瞳がぐんとちかく見えて、目が離せなかった。
- (10) 目の前の2人があまりに淡々と普通の親子の会話をするので、私は目まいがした。

上の例では、従属節事態が完了していないうちに、主節事態が起こるのであり、時間的に重なり合っているので、同時であると解釈できる。

また、岩崎 (1994) は、「従属節事態先行型のルノデ／ルカラ」文には従属節の述語が過程をもつ動きを表す動詞であるという「語彙的特徴」があると主張している。この特徴と「観察」の視点（ここでいう「観察」は知覚にひとしい）にどのような関連があるのかについては、岩崎 (1994) は「ノデ節、カラ節内の述語が過程をもつ動きを表すのであれば、過程があるがゆえに同時に見ることができるので観察の対象となれるが、過程のない動きは同時に見ることができず観察の対象とならない。」と述べている。動きの過程の有無は、岩崎 (1994) では「テイル形にして動作の進行を表せるかどうかや「～シハジメル」とすることができるかどうか」によって判定される。たとえば、岩崎 (1994) は(11)を従属節の述語が過程をもたない動きを表す例文として挙げている。

- (11) 父は借金をたくさんのこして東京を出たので、ぼくが先生や友だちに手紙を書いてはいけないといていた。

つまり、上の文の従属節述語「出る」は過程をもたない動詞であるから、観察の対象とならないと岩崎 (1994) は主張しているわけである。しかし、「花子が教室を出るのを見た」は言える。この場合、「出る」は「観察」される対象で、しかも、観察時と同時でなければならない。従って、「過程のない動きは同時に見ることができず観察の対象とならない」という言い方は適切でないと思われる。

4. 「同時型スル形」という位置付け及び「同時型スル形」のテンス・アスペクトの意味

前節での先行研究についての分析から分かるように、沈（1984）が「脱テンス」とした例には「時間関係が裏にひっこんでしまう」とは考える必要のない例、つまり、従属節と主節が同時の関係にあると考えられる例があった。同現象を岩崎（1994）が「従属節事態先行型のルノデノルカラ」としているが、その位置付けに関しても、沈（1984）と同様の問題を有している。これらの従属節と主節が同時の関係にあると考えられる例では、従属節の運動動詞述語がスル形のまま主節との同時を表している。結論を先にいうと、本稿では、このような例の従属節における運動動詞述語のスル形を「同時型スル形」と称する。次のような例のカラ・ノデ節における運動動詞述語のスル形も「同時型スル形」として解釈できると思われる。

- (12) 彼が大声で歌を歌うから、私は眠れなかった。
- (13) 雨がとめどもなく降るので、出かけるのを止めた。
- (14) 隣の女がくどくどしゃべるので、淳一はほかの席に移った。
- (15) 妹が大きな音で音楽をきくから、私は両親の話が聞こえなかった。
- (16) 子供が外で騒ぐので、彼女は窓を閉めた。

これらの例のカラ・ノデ節における述語のスル形をシテイル形に言い替えても、文の意味はそれほど変わらないということもその従属節と主節の事態が同時であることの証明になるだろう。

- (12)' 彼が大声で歌を歌っているから、私は眠れなかった。
- (13)' 雨がとめどもなく降っているので、出かけるのを止めた。
- (14)' 隣の女がくどくどしゃべっているので、淳一はほかの席に移った。
- (15)' 妹が大きな音で音楽をきいているから、私は両親の話が聞こえなかった。
- (16)' 子供が外で騒いでいるので、彼女は窓を閉めた。

一般に、従属節における運動動詞述語のスル形は絶対的テンスの発話時未来か相対的テンスの主節時以後を表すとされている。しかし、上の例では従属節の述語がスル形でありながら、主節との同時を表している。運動動詞のスル形はテンス的に未来・以後、アスペクト的に完成性、つまりひとまとまり性を表すということが、これまでの先行研究で明らかにされてきた。しかし、(12)～(16)における主節との同時を表す従属節の述語スル形はこれらのいずれにも属さないようである。テンス的に発話時未来でもないし、主節時以後でもない。アスペクト的にみても主節時に従属節事態がまだ完成していないと考えられるので、完成性（ひとまとまり性）を表しているとも言えない。では、この場合の「同時型スル形」はどのように位置付けたらいいのか。これを明らかにするため

に、まず工藤（1995）での議論を見てみよう。

工藤（1995）ではトキ・アイダ節、知覚動詞補文に現れるスル形の性質について論じている。トキ・アイダ節について次のように述べている。

「トキ、アイダ」のような2つの出来事が同時関係にむすばれている場合に、従属文の述語としてスル形式、シタ形式が使われたときは、主文の出来事時よりあと、あるいは主文の出来事よりまえという相対的テンス的意味を実現しえなくなって、〈限界達成前の段階—限界達成後の段階〉というかたちで、アスペクト的に対立するようになる。〈以後—以前〉という外的時間関係が、〈限界への到達が以後＝限界到達前の段階〉〈限界への到達が以前＝限界到達後の段階〉というかたちで、運動内部の時間的段階の違いへと転換していくのである。（p.236）

知覚動詞補文についてもほぼ同様のことを述べている。

主文の動詞が「見る」のような知覚動詞である場合には、知覚は「いま、ここ」の具体的現象しかとらえることができないがゆえに、〈同時タクシス〉となる。従って、スルーシタは、相対的テンスとして対立しえず、〈限界達成前の段階（プロセス段階）〉か〈限界達成後の段階（結果段階）〉かで、アスペクト的に対立することになる。（p.256）

工藤（1995）では(17)～(20)のような例を挙げている。

(17) 郷里に帰る時、旧友に会った。

〈「帰る」という運動の限界到達が主文の出来事時以後＝限界達成前の段階と同時〉

(18) 郷里に帰った時、旧友に会った。

〈「帰る」という運動の限界到達が主文の出来事時以前＝限界達成後の段階と同時〉

(19) みんな、学校が焼けるのを見て、泣き出してしまいました。

(20) みんな、学校が焼けたのを見て、泣き出してしまいました。

まとめると、トキ・アイダ節や知覚動詞補文の述語スル形は相対的テンスの主節時以後や絶対的テンスの発話時未来を表すのではなく、〈限界到達前の段階〉という運動の内的局面、つまり出来事間の外的時間関係ではなく、従属節事態の内的時間——限界未達成性（未完了）というアスペクトを表していると言工藤（1995）は主張している。このような観点から、本節で扱っている「同時型スル形」を見てみよう。

(21) 子供が外で騒ぐので、彼女は窓を閉めた。(4)の再掲)

「子供が騒ぐ」という事態は「窓を閉める」前に開始していて、「窓を閉める」時点にも続いていると考えられる。さらに、「窓を閉めた」後にも続いていく可能性もあり得る。つまり、従属節事態の内的局面が展開されている間に、主節事態が起こることである。この場合の「騒ぐ」という動作は主節時以後や発話時未来としてのひとまとまり性を表しているのではなく、未完了（限界未達成性）というアスペクト性を表し、基本的に工藤（1995）で論じたトキ・アイダ節や知覚動詞補文の述語スル形と同じアスペクト的意味を持っていると言える。しかし、このようなカラ・ノデ節における「同時型スル形」はトキ・アイダ節や知覚動詞補文の述語スル形と未完了（限界未達成性＝限界到達前の段階）というアスペクトを表す点で同じであるとしても、全く同じであるとは言えない。

前にも引用したように、工藤（1995）は、トキ・アイダ節と知覚動詞補文の述語スル形は相対的テンスの主節時以後を実現し得なくなり、シタ形とのアスペクト対立を表すようになること述べている。トキ・アイダ節では、従属節と主節が同時であるという外的時間関係は「～時」、「～間」という名詞句により表すことができる。知覚動詞補文の場合も、主節の述語である知覚動詞の内在的性質により、補文と主文が同時であるという解釈が得られる。つまり、トキ・アイダ節にしても、知覚動詞補文にしても、従属節と主節が同時であるという外的時間関係は名詞句や主節の述語動詞の特殊な性質により保証されている。従って、トキ・アイダ節、知覚動詞補文における述語動詞のスル形は主節との外的時間関係——同時性——の解釈は、ほぼ義務的であるといえる。これに対して、カラ・ノデ節にはトキ・アイダ節や知覚動詞補文に見られるような言語的な保証がない。このような、カラ・ノデ節とトキ・アイダ節に見られる違いは、次節で見る「同時型スル形」の使用条件にも影響してくる。

本節では、トキ・アイダ節や知覚動詞補文における述語のスル形と対比しながら、カラ・ノデ節における「同時型スル形」のテンス・アスペクト的意味の分析を行なった。そして、この場合の「同時型スル形」はテンス的には、主節との同時を表し、アスペクト的に未完了（限界未達成性）を表す、ということを指摘した。次節では、この「同時型スル形」の使用条件を見ることにする。

5. 「同時型スル形」の使用条件

4. ではカラ・ノデ節における「同時型スル形」はテンス的に主節との同時、アスペクト的に未完了（限界未達成性）を表すということを明らかにした。この節では、こうした「同時型スル形」の使用条件を明らかにする。実際の例を分析した結果、「同時型スル形」の文は、その従属節の述語が「非内的限界動詞（atelicな動詞）」であるものが多いということが分かった。ここでいう「非内的限界動詞」は基本的に工藤（1995）に従う。

つまり「内的必然的限界のないもの、どこで終わっても運動が成立したといえる任意の終了限界しかもたないもの」である。では、なぜカラ・ノデ節の述語が非内的限界動詞である場合に、「同時型スル形」が使われやすいのか。この点について以下で論じたい。

ここで非内的限界動詞と内的限界動詞 (telic な動詞) の違いに注目されたい。工藤 (1995) によれば、「内的限界動詞には必然的時間限界があり、その限界にいたれば、必然的に運動が尽きて、結果状態が成立する」という。つまり、内的限界動詞は外的条件 (たとえば量規定など) をつけなくても、動きの終了限界が容易に把握できる。これに対して、非内的限界動詞は外的条件をつけなければ、動きの終了限界が任意であるから、把握しにくい。工藤 (1987) では、変化をとらえていない動詞² にあつては、終わりの局面 (境界点) はぼやけており、〈ひとまとまり性〉は相対的に消極的であり、〈完成性〉—〈未完成性〉という対立が中和しやすいという旨のことを述べている。また、工藤 (1989)、(1995) でも、同じようなことを述べている。

変化を捉えていず、そこで運動が尽きるべき限界がない動作 (動き) の場合にはスルーシテイルの対立が中和することもおこってくる。(工藤 (1989) p.10)

どこで終わっても運動が成立したといえる、任意の終了限界しかもたない非内的限界動詞において、完成相と継続相のアスペクト対立の中和が起りやすいのは必然的であろう。(工藤 (1995) p.232)

これに従えば、カラ・ノデ節における述語動詞が非内的限界動詞である場合には、動きの終了限界が把握されにくいので、動きのひとまとまり性より未完了性のほうが前面に出やすい。つまり、スル形のひとまとまり性としての機能がうすれ、未完了としての機能が前面に出るから、シテイル形との対立が中和されやすくなるという結論が得られる。それに対し、内的限界動詞では、動きの終了限界が把握しやすいので、スル形のひとまとまり性が前面に出ることになり、未完了性 (限界未達成性) が前面に出にくくなると考えられる。すなわち、カラ・ノデ節の「同時型スル形」は相対的テンスの主節時以後や絶対的テンスの発話時未来を表すスル形と違い、スル形としてのひとまとまり性が解消され、シテイル形との対立が中和されているから、スル形のまま主節との同時を表すようになるのである。

しかし、前に述べたトキ・アイダ節や知覚動詞補文の場合はこういった制限がないようである。非内的限界動詞も内的限界動詞もスル形で未完了性 (限界未達成性) を表わせる。(17)の「帰る」は内的限界動詞であるし、次の例の「行く」、「来る」も内的限界動詞である。

(23) 田舎に行くとき、交通事故にあった。(工藤 (1995))

(24) 先生が向うから来るのを見た。

なぜこういったことが起こるのかは、トキ・アイダ節、知覚動詞補文とカラ・ノデ節の構文上の違い、あるいは動詞の語彙的意味の違いに求められると思われる。前にも述べたように、トキ・アイダ節や知覚動詞補文では「～時」や「～間」のような名詞句、知覚動詞の内在的性質により、従属節と主節が同時であるという解釈が義務的である。従って、従属節の述語が内的限界動詞のスル形であっても、それが主節との同時を表さなければならないから、未完了性（限界未達成性）を前面にさしだすことができるのではないかと考えられる。

以上では、カラ・ノデ節の述語が非内的限界動詞である場合に従属節の述語がスル形で主節事態との同時を表しやすいくということを見てきた。これは動詞の語彙レベルの議論であるが、動詞句のレベルの議論では、どのようなことが言えるであろうか。次のような例では従属節の述語が内的限界動詞であるにもかかわらず、スル形で主節との同時を表すことができる。

(25) お客さんが[次々に] 到着するから、旅館はてんてこまいだった。

上の例を見ると分るように、「到着する」という動詞は内的限界動詞であるが、動詞句レベルで「次々に到着する」はもはや限界動詞ではなくなり、非限界動詞句になる。非限界動詞句は非内的限界動詞と同じ性質を持っているので、従属節の述語はスル形のまま主節との同時を表すことができるようになり、「同時型スル形」が使えるようになるのである。次のような例も同様である。

(26) 訪問者が[次々に] 訪ねてくるから、主人は一日中その対応に追い回されて、お食事をする時間もなかった。

(27) 飼っている金魚が[どんどん] 死ぬから、太郎は慌てた。

(28) お米が[ボロボロと] 落ちるので、どうしたのかと思って、よく見ると、米袋がやぶれていたのだ。

つまり、従属節の述語が内的限界動詞であっても、それが動詞句レベルで非限界動詞句になれば、従属節の述語はスル形で主節との同時を表しやすくなると言える。

逆に、従属節の述語が非内的限界動詞であっても、量規定など一定の条件を付け加えると、動詞句レベルで終了限界が把握されるようになる。従って、従属節の述語が非内的限界動詞であっても、動詞句レベルで限界動詞句ということになり、スル形で主節との同時を表しにくくなる。

(29)? 彼が大声で[一時間] 歌を歌うから、私は眠れなかった。

(30)? 隣の女が[電車が到着するまで] くどくどしゃべるので、淳一は他の席に移った。

以上では、カラ・ノデ節の述語が非限界動詞（句）である場合に「同時型スル形」が使いやすいということを指摘した。しかし、カラ・ノデ節の述語が非限界動詞（句）であれば、かならずスル形で主節との同時を表せるとは言えない。たとえば、次の(31)は、従属節の述語は非内の限界動詞であり、また従属節事態と主節事態が同時である可能性も十分あり得るにもかかわらず、後続—先行の読みにしか取れない。

(31) 太郎が勉強するから、お母さんはテレビの音を小さくした。

同時を表すには、「勉強する」を「勉強している」に言い替えなければならない。

(32) 太郎が勉強しているから、お母さんはテレビの音を小さくした。

カラ・ノデ節において、運動動詞述語のスル形は基本的には相対的テンスの主節時以後や絶対的テンスの発話時未来を表し、主節との同時はシテイル形が表す。スル形でカラ・ノデ節事態と主節の事態の同時を表すには、上で述べた「従属節の述語が非限界動詞（句）である」という条件のほかにも、さらに条件が必要なのである。「同時型スル形」の例を見ると、そのカラ・ノデ節には動作過程をとりあげる様態副詞のような修飾成分を伴っている場合が多い。

(33) 雨が[とめどもなく]降るので、出かけるのを止めた。((13)の再掲)

(34) 隣の女が[くどくど]しゃべるので、淳一はほかの席に移った。((14)の再掲)

動詞の前に動作過程をとりあげる様態副詞が現れると、動作過程が取り上げられ、その動作が未完了であることを表しやすくなる。また、これから起こる動作に対しては、具体的な様態を描写することが難しいから、従属節に「とめどもなく」、「くどくど」のような動作の具体的な様態を表す成分を持つ(33)(34)では、動詞のスル形はひとまとまり性の主節時以後や発話時未来を表しにくくなると思われる。以上のような理由から、このような文の従属節の述語スル形はアスペクティックに未完了性（限界未達成性）、テンス的に主節との同時を表すようになるのではないか。(31)も次のように言い替えると、従属節と主節が同時であると解釈できるようになる。

(31)' 太郎が[一生懸命に]勉強するから、お母さんはテレビの音を小さくした。

しかし、「同時型スル形」の例には従属節に動作過程を取り上げる様態副詞が現れない例もある。

- (35) 花子が泣くので、太郎は飴玉を与えてやった。((8)の再掲)
 (36) 子供が外で騒ぐので、彼女は窓を閉めた。((4)の再掲)

このような例の従属節の表す事態はあらかじめその生起が予測しにくいものである。たとえば、「花子がこれから泣く」、「子供がこれから騒ぐ」とは普通言えない(いつも一定の時間になると、「泣く」、「騒ぐ」ということが起こる場合は別として)。このように、これらの例では、主節主語が従属節の事態を予測した上で主節の動作を起こすということは考えにくいから、言い替えれば、主節時以後や発話時未来を表すとは考えにくいから、同時解釈ができるようになると考えられる。

6. 「同時型スル形」と「同時型シテイル形」の区別

「同時型スル形」と「同時型シテイル形」はどちらも従属節と主節の事態が同時であることを表すことができる。これまで論じてきた「同時型スル形」をすべてシテイル形に言い替えられるということもそれを裏付けていると思う。また、「同時型スル形」は「同時型シテイル形」と同じように、従属節と主節の事態が同時であることを表すから、その従属節には主節から独立した時間成分が現れにくい。仮にこのような文に時間成分が現れても、それは文全体を修飾するものであり、従属節を修飾するとは考えられない。以下の(37)(38)を見てほしい。

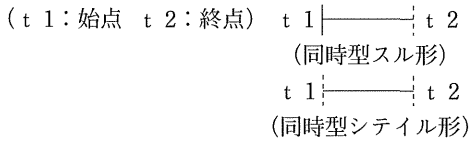
- (37) お父さんが本を読んでいるから、私は一人で散歩に行った。
 a? [昨日、お父さんが本を読んでいるから]、私は一人で散歩に行った。
 b 昨日[お父さんが本を読んでいるから、私は一人で散歩に行]た。
 (38) 子供が外で騒ぐので、彼女は窓を閉めた。((4)の再掲)
 a? [さっき、子供が外で騒ぐので]、彼女は窓を閉めた。
 b さっき、[子供が外で騒ぐので、彼女は窓を閉め]た。

「同時型スル形」と「同時型シテイル形」は上に述べたような相似点を持っている。しかし「同時型スル形」と「同時型シテイル形」は常に言い替えられるわけではない。

- (39) a 二人がぼそぼそと話をするので、いやな感じがした。
 b [部屋に入ってみると]、二人がぼそぼそと話をしているので/?話をするので、いやな感じがした。
 (40) a 外は雨が降るので、娘のことが心配になってきた。
 b [ふと見ると]、外は雨が降っているので/?雨が降るので、娘のことが心配になってきた。
 (41) a 赤ちゃんが輪ゴムをかじるので、お母さんは慌ててそれを止めた。

b [気がついたら]、赤ちゃんが輪ゴムをかじっているので/?輪ゴムをかじ
るので、お母さんは慌ててそれを止めた。

上の(39)~(41)から分かるように、「同時型スル形」の使用範囲は「同時型シテイル形」ほど広くない。従属節に「途中から従属節事態が気づかれたり、見られたりする」ということを含意するような副詞成分が現れると、「同時型スル形」は使えなくなる。このようなことが起こるのは、「同時型スル形」と「同時型シテイル形」が表している動きの内的時間の局面が違うからであると考えられる。図で示すと次のようになる。



つまり、「同時型スル形」は開始限界(始点)を捉えているが、「同時型シテイル形」は開始限界(始点)と終了限界(終点)をのぞいた進行過程の局面だけを捉えている。従って、従属節に従属節事態の開始限界が捉えにくくなるような副詞成分が現れると、「同時型スル形」が使えなくなり、「同時型シテイル形」を使わなければならないのである³。

7. 結 び

本稿では、沈(1984)が「脱テンス」、岩崎(1994)が「従属節事態先行型のルノデ/ルカラ」とした現象に、従属節事態と主節事態が同時であると位置付けられる例があると指摘した。そしてこのような例の従属節における運動動詞述語のスル形を「同時型スル形」とし、この場合のスル形がテンス的に主節との同時、アスペクト的に未完了(限界未達成性)を表すということを明らかにした。次にこうした「同時型スル形」の使用条件を分析し、「同時型スル形」に使える動詞(句)は非限界動詞(句)であることが多いという事実を指摘した上で、従属節に動作過程を取り上げる様態副詞のような修飾成分が現れたり、従属節事態が予め予測しにくい事態であるような場合に、「同時型スル形」がさらに使いやすくなるということを指摘した。また、「同時型スル形」と「同時型シテイル形」の、動きの内的局面の捉え方の違いに注目し、「同時型スル形」は開始限界(始点)を捉えているが、「同時型シテイル形」は開始限界(始点)と終了限界(終点)を除いた進行過程の局面だけを捉えているということを明らかにした。

沈(1984)が「脱テンス」、岩崎(1994)が「従属節事態先行型のルノデ/ルカラ」とした例には、従属節述語に発話動詞をとるものや心理動詞をとるものが多く含まれていた。今回、このような例については詳しく触れられなかったが、本稿筆者は基本的にこ

これらの例も「同時型スル形」として捉えることができると考えている。しかし、沈(1984)が「脱テンス」、岩崎(1994)が「従属節事態先行型のルノデ／ルカラ」とした例の中には、「同時型スル形」とみることができないものも、もちろん存在する。それは、「～ルカラ～ノダ」という形をとる類の文であるが⁴、このような文に関しては、別稿を準備している。なお、本稿が今回扱ったような現象は他の従属節においても見られるが、これらについての詳しい考察は今後の課題としたい。

【注】

- 1 三原(1992)は、発話時、主節時を視点とする二種の時制を設定し、「視点の原理」を導きだしている。
- 2 変化をとらえていない動詞は非内的限界動詞であるとされている。
- 3 「同時型スル形」と「同時型シテイル形」の区別については、福嶋健伸氏(筑波大学大学院)より貴重なコメントをいただいた。
- 4 ここでは、「～ルカラ～ノダ」文のうち、従属節事態が発話時未来や主節時以後を表さない場合を指す。

【引用文献】

- 井上 和子(1976)『変形文法と日本語く上・下』大修館書店
岩崎 卓(1994)「ノデ節、カラ節のテンスについて」『国語学』179集
工藤真由美(1987)「現代日本語のアスペクトについて」『教育国語』91
(1989)「現代日本語の従属文のテンスとアスペクト」『横浜国立大学人文紀要』(語学・文学)三十六
(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
砂川有里子(1986)『する・した・している』(日本語文法セルフ・マスターシリーズ2)くろしお出版
沈 一(1984)「複文の接続助詞でくくる節の述語のテンス「スルが」と「シタが」、「スルので」と「シタので」など」『語学教育研究論叢』—創刊号—大東文化大学教育研究所
寺村 秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
中右 実(1980)「テンス・アスペクトの比較」『日英比較講座(第2巻)文法』大修館書店
益岡隆志・田窪行則(1989)『基礎日本語文法』くろしお出版
三原 健一(1992)『時制解釈と統語現象』くろしお出版

(か ちょうぼつ 中国北京外国語大学日本学研究センター)